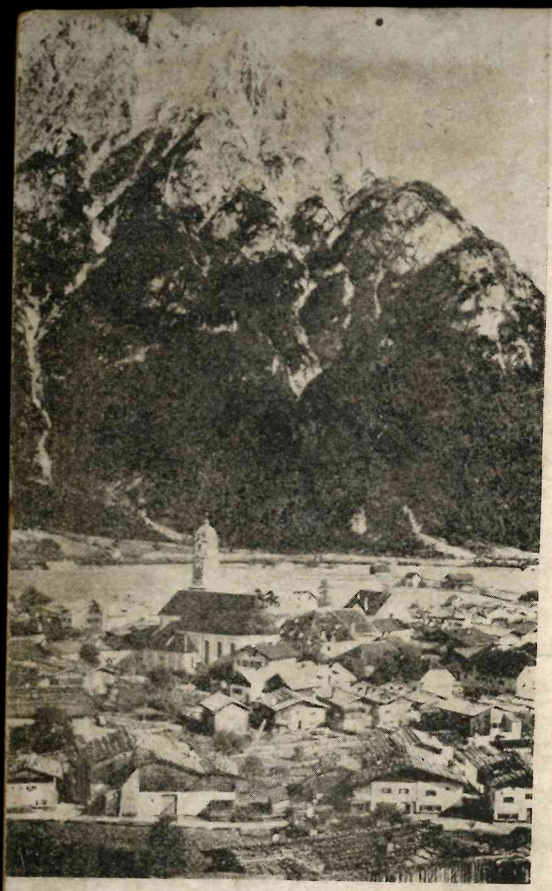

Mittenward

第二巻 第七号 通巻 第十輯

プシケ

7月 1953

虹霓

田中克己

暑き日なりき
大寺の三重塔の風鐸も
そよろ動かぬひるさがり
門前の茶屋に　日向に腰かけて
彼はゐたりき
手にせる盃よりは虹立てり
その吐く息のうつくしさ——
まことなり　すじかひの古道具屋の
光淋にまがふ花鳥の屏風さへ
その色褪せてみゆるほど

泉州堺と伊東静雄との記念に
（昭和十三年八月号コギト所載）

文林院静光詩仙居士

伊東静雄追悼号

その三

「夏花」ごろの伊東静雄氏

プシケ月例集り　七月十一日（土）
午后七時より

伊東靜雄の好みとしての盛場

小高根二郎

少くとも、私と林富士馬とは、伊東靜雄の喪失を最も哀惜する立場の、一人であらう。伊東に対する親炙の仕方は、私は『わがひとに與ふる哀歌』の後期と、『夏花』の全期に当る五ヶ年間の、日常的な交際と云ふ形であつたし、林は『夏花』後期からの、二百通にあまる文通と云ふ形に於てであつた。その親炙の仕方は違つていたにしろ、彼の謹嚴な人柄から得た啓示と、透徹した孤寂な詩精神から汲んだ教へは、恐らく一つのものであつたらう。

伊東は、あの氷のやうに清澄で美しい、孤寂な精神の持主であるにかかはらず、好みとしては、ごちやごちや……と混雜した庶民的な盛場が、大好きであつた。南大阪は、浪速区の惠美須町から入つた新世界が、その一つであつた。そこら一帶の歡楽街は、明治卅六年の第五回内国勧業博覽会から発展したもので、そこの象徴のやうに、エッフェル塔まがひの三百有餘尺の通天閣が聳えてゐた。その鉄塔を中心に、セコンド・ラン、サード・ランがかかる映画館が列んでゐた。その他にイラハイ！ イラハイ！ の二流どこの寄席や女剣戟が、人の渦の中心となつてゐた。その渦を、いやが上にも湧き立てる、大波小波どうどう……の楽隊の餘韻が、そこはかとなく薄れるあたりには、噴水が吹きあげるセルロイド球を狙ふ射的場や、吃驚善哉屋や、かち割り卵を乗せたカレー・ライスが賣物の西洋御料理やビヤホールや、やとなの出入する貸席までが、安直な歡楽の二陣として控へてゐた。

この「新世界」と呼ばれる淺草風な歡楽街を、伊東は或る種の大阪の象徴として愛してゐた事情は、『四季』第六十七号萩原朔太郎追悼号の伊東の追悼文「萩原先生を哭す」を見れば判る。伊東は、新世界から天王寺動物園よりにあるラジウム温泉に、下阪された朔太郎先生を案内してゐる。

――四五年前、先生が大阪においでの折、先生の思ひつきで天王寺公園のラジュウム温泉といふ大きな風呂に一緒には入りに行つたことがあつた。先生は幼時ここで万国大博覽会のあつた時見物においでになつて、通天閣やケーブルカーをなつかしく印象していらつしやるやうであつた。しかしその時は一向興趣を覚えられない風で、まひるの白々しい大風呂の中を見まはしながら、つまらない〜〜と云つておいでになつた。私はその時、先生の御体格の中々立派でおありのことに驚きもし力強くも思つたのであつた――

この新世界には、朔太郎好みの明治趣味は通天閣をおいては、既に地を拂つてゐた。「つまらない〜〜」と、朔太郎先生が言はれたのも当然だが、そこに案内をしたのを、「先生の思ひつき」に伊東は飯してゐるが、それには彼の発案もあづかつて力があつたと、私は想像する。それほど伊東は、おたなの奉公人たちのやうに、この盛場を愛してゐた。

彼は埃の目立つソフトの鍔から、手入の悪い蓬髪を溢れさせ、焦点の鋭い眼を光らし、

折目の正しくない疲れた脊広をまとひ、艶の失せた靴をつッかけて、そそくさ……と、雜沓を泳いで歩いた。一見して中学教師と判る風態から、どこかのサボ中学生でも彼を見かけたら、彼を風紀取締の教護連盟の教師と間違へて、恐らくぞッ！ と足が地面に凍りついたことであらう。彼は映画館の前で立ち止ると、絵看板を見上げた。内容が、彼の頭のなかのもやもやを拂拭してくれるか、或ひは樂しく和めてくれるか？ を、確かめるためである。彼は、中原中也や、辻野久憲や、立原道造を亡ぼした夭折を憎んだやうに。悲劇が大嫌ひであつた。さりとて、見た後になにも残らぬ喜劇を格別愛好する様子もなく、いはゆる平凡な、当り觸りのないハッピー・エンド物が好きらしかつた。その趣向の大衆的な点も、新世界を好んだ趣味に似てゐた。彼は映画なんぞの藝術性は、問題にしてゐなかつた。楽しければ、それで十分……と云ふ月並な鑑賞の仕方のやうに見受けた。弟の壽惠男さんが、京大を出て記録映画の助監督になつた時も、それだけで十分満足さうに、私に話したことを思ひ出す。

この二流の歡楽街で、セコンド・ランのハッピー・エンドものを樂しむ……と云ふ彼の趣味は、詩や歌の好みの上でも全じことであつた。ギリシャ気狂として、はたの眼にはともかく、自分では十分に幸福に死んでいつた当時としては二流のヘルデルリーンや、シュワーベンの牧師館に隠れ棲んで、文壇的な野心の埒外で、清純な愛だけを歌ひすぎたメーリケを、格別に彼が好んだ事情にも、通じるものがある。さう言へば、結社意識のいかつい芭蕉よりも、飄々乎とした圓満具足のお人好しの鬼貫を愛した気持にも、通ふものがある。彼はまた私と全じに曙覽を好いた。私の処女小説「良幻童女香合」には、曙覽の初期の哀歌に觸れるところがあつたが、それを読んでくれた伊東は、こんな端書をくれてゐたのを、手紙を整理してゐて発見かつた。

――いつもごぶさた。貴下益々健筆甚だ賀すべし。小説（？）よみました。このごろ小生も志濃夫廼舍歌集ずつとよんでるところ故え、暗合面白く思ひました。今年中に小生の編輯にて、全歌集某文庫本にするつもりにて勉強中、又お知恵拝借するかもしれません。小生の曙覽熱も相当のものと、以て御想像相成り度し（以下略）――

曙覽が松平慶永候の招きにも應ぜず、福井の城西三橋の隔室に隠棲してゐた事情は、曙覽の高雅にして奔放不羈の歌調に寄せる愛著とは別に、伊東の気を引いたものであらう。田中克巳が花子未亡人の談つたところを傳へた話によると、桑原武夫氏の紹介かで、伊東に三高教授の椅子がかかつたことがあつたとのことだが、彼はその旨い話には乗らずに、住吉新制高校の貧寒な一教師で終つた物語も曙覽の隠棲の気組に、どこか似てゐるやうな気がする。この伊東の隠棲的な気組と、多分に荷風趣味である二流の盛場好みとの間に、間隙性を発見することができなくもないが、花子未亡人からの便りによると、彼は家庭的な賑やかさを好いてゐたさうだから、或ひは単純な意味での賑やかさを、好いてゐたからかもしれない。直接に彼から聞いた話であるが、彼は父の負債を、唯一の遺産として継承した。花子夫人を、堺高女かの先生にしてゐたのも、負債返済に協力させるため……とのことであつた。昭和十年の初夏に、彼に初めて出会つた時にも、「その返済もやつとすみます。」と、ほッ……とした面持ちで語つてゐた。かうした重壓を逃れるためには、莫迦陽気な盛場が、恰好な逃避所であつたかもしれない。しごく凡庸なハッピー・エンドで、眞空状態までに和められた伊東の頭脳裏に、

映画館を出、盛場を抜け出る刹那に、浸り切つてゐた盛場の雰圍氣とは、天と地ほどに懸絶した異常なほどにオクターブの高い韻律がヒビの入つた古靴を踏みだす一歩一歩ごとに地から湧き立つたに相違ない。まるで彼が外部世界からのゴーストとして出ち現れ、その示顯を告げる伴奏であるかのごとくに……。電車道路の自動車の驚笛は、深奥な森の立樹のざはめきに聞こえ、カーブを切る電車の軋の軋音は、光の内に突入する渓谷の奔流の響きになつたに相違ない。彼はこの虚無の陶醉——それは彼にとつては、觀智の凝視……と仝じことだが——から、詩の発端になる言葉を、乗のやうについ！　と、路上から拾ひ上げたに相違ない。

八月の石にすがりて

の詩句は、かうして盛場新世界の塵泥の中から、拾はれたのである。

この詩の成り立つた事情のことは、雜誌「祖國」に詳説したが、それは新世界を彷徨してゐた彼が八月の暑熱にやられて、通天閣の塔の下に、懸命に目まひに堪へてゐた時に死の幻覚と戦ふために、ふと口ずさんだ、呪文のやうな言葉である。腦貧血によつて、瞹間、眞ッ暗闇となつた彼の腦裏に、眼をつぶる前にふと……塵泥の中に見た、南京豆かなんぞの破れた紙袋が、八月の燃えるやうな石にすがつて、多幸であつた生涯を閉ぢるためにはたはた……と儚く羽搏く、胡蝶に見えたに違ひない。

運命？　さなり、
あゝわれら自ら孤寂なる発光体なり！

白き外部世界なり。

……の　その幻覚に続く詩句は、ルンペン達の宿となるその塔下に、行倒れとなつて死ぬかもしれない伊東自らの、孤寂な精神像を歌つてゐるのである。

この詩は別に伊東の代表作ではないが、彼の好んだ盛場新世界にからんで、先づ一番に私に思ひ出される詩……として、私にとつて意味を持つものだが、又、或る意味では、氷花のやうに酷薄華麗な彼の詩精神を代表してゐるやうに見受ける。

見よや、太陽はかしこに
わずかにおのれがためにこそ
深く、美しき木蔭をつくれ。
われも亦
……の酷薄無慙な華麗さは、どこか、富士川のほとりの捨子を「唯これ天にして汝が性のつたなさをなけ」と、救ふこともなく行き過ぎ、家郷の兄が守袋から母の遺髪をとりだして、「母の白髪おがめよ」と泣いてゐるにかかはらず、秋の霜ほどの涙しか眼に浮べてゐぬ、野ざらし紀行の芭蕉の酷薄無慙な美しさにも、通ふところのものがある。

まこと、『わがひとに与ふる哀歌』から續く、この頃の伊東は、歌ふ詩の復興者としてのゆきてかへらぬ……悲痛な覚悟を抱懷してゐたから、非情な蕉風の発足をしるす野ざらし紀行の風懐に似てゐるのも、或ひは当然であるかもしれない。

伊東が愛してゐた、この新世界とは別な盛場の一つは、堺の大浜公園だ。『わがひとに与ふる哀歌』を出してから、彼は南海鉄道阪堺線の天神の森から、堺市街の北郊に当る三国ヶ丘に引越した関係で、そこで編んだ『夏花』に收録されてゐる「夕の海」「燈台の光を見つつ」なぞは、堺の北公園、大浜公園に圍まれた、中世の殷盛な面影もなくさびれた堺港に取材されてゐる。

そこは、先の新世界と違つて、夏以外は大方に閑散な盛場で、通天閣と仝じく、明治三十六年の第五回勧業博覧会の遺物である水族館を中心に、大浜の潮湯や、席貸や料理屋なぞが、つらなつてゐる。そこから續く二流の海水浴場である大浜公園に、夏になると彼は海水浴に行つてゐた事情が、手元に残つてゐる彼の手紙で判る。

——文芸世紀の御文章拝見。拙詩集いささか季節外れにて、さぞ書きづらかつたことならむとお気の毒に思ひました。すみません。どうしてこのごろは「退くつして横つてゐる」どころではありません。三月以来の不健康、このごろの酷暑の日光にいささか回復、この十日程毎日のやうに、あの燈台のある大浜の海岸に海水浴に行つてゐます。そして夜は少しづつ文章書きためてゐます。あなたの小説毎号拝見してゐます。よくわかるつもりであります。どんどんお書きなさい——どこまでしつこくやれるか極限をためしてごらんなさい。私はこのごろ何の気なしに暗夜行路の後篇をよんで、小説といふものは中々面白いものだなあと、思つてをります。志賀といふ人の文章は私は今まですこしも分らずにゐたのです——

この手紙は、私が『夏花』評を書いたので貰つたものだらう。「あの燈台のある大濱の海岸」とあるやうに、堺港の突端には、明治十年の建設にかかる五丈一尺、晴天光達十哩と稱する燈台があつた。が海岸べりに建てられてゐる潮湯——そこには、家族湯、席貸、喫茶、食堂の設備があり、少女歌劇のかかる舞台もある——の建物があまりに大きかつたので、燈台の立姿は実体よりは意外なほど貧相に眺めやられたものだ。夕になると燈台の頂きには緑の燈火が点された。その燈火が次第に垂れこめる暗闇で、正確な明彩と光度に燃え上るまで、水海がヘリの伊東は、海岸に蹲つて、凝視め續けてゐたことがあつたのだらう。

徐かで確実な夕闇と、絶え間なく揺れ動く白い波頭とが、灰色の海面から迫つて来る燈台の頂には、気付かれず緑の光が点される。

それは長い時間がかゝる。目あてのない、無益な豫感に似たその光が、闇によつて次第に輝かされてゆくまでは——。

が、やがて、あまりに規則正しく回転し、明滅する燈台の緑の光に、どんなに退屈して、倦むことなく、海は一晩中横はらねばならないだらう。

この燈台の緑の光が、正確に回転し、倦むことなく明滅するのを慥めてから始めて気附いたかのやうに、伊東は安堵して立ち上つたことであらう。その伊東の胸にこの時ほッ！と、堺港の復興者であつた吉川俵右衛門の苦節二十餘年の経營の物語が、燈台の光のやうに点つてゐたに相違ない。

俵右衛門は江戸の人、材木商であつたらしい。安永の頃、堺で材木を買ひ、江戸に送らうとしたが、風浪のため廻船ままならず、一端木材を大阪に曳航し、そこから江戸に廻送した。この堺港の不備を知つた俵右衛門は、後日、私金二万金を携へて再び来堺した。彼は地理を踏査し、灣形を案じて築港案を得るや官許を求めた。が、案があまりに大規模であつたので、世を欺く絵空事なりとして却下された。が、俵右衛門はそれに屈せず、さらに精密な研究の末、成案を得て再三官許を願請したが、强訴者として投獄の憂目をみるに至つた。獄窓にあること十五年、やうやく放免されたが初志を屈せず、さらに十餘年の経營のはてにやつと官許を得るに至つた。彼は新川を開き、吾妻橋、榮橋、勇橋を架橋すると数年にして絵空事とされた大築工事を見事やり了せた。

私は伊東静雄に伴はれて堺の街を散歩してゐる時、この物語の概略を彼から聞かされた

やうな曖ろな記憶がある。彼がこの苦節の港に点る燈台に寄せて、無益に似た先覚者の不屈な魂の光を歌つたのは、むしろ当然のことだ。彼は俵右衛門の苦節を回想しつつ、日脚の長い夏の黄昏からすずろかに夜へと移行する闇の遅さで、やつと視野に入つた緑の光がやがて正確に点滅放光するさまに、自分の志を鼓舞してゐたのであらう。が、その点滅放光までの長い長い時間以上に物憂く感じられたのは、その放光にも気附かぬふりで臥つてゐた黒い海の冷膚な広袤であつたであらう。緑の光は、その日の伊東の希願であり、黒い海は全時に歎きであつたことであらう。『わがひとに与ふる哀歌』が世に出てから、かれこれ俵右衛門の苦節ほどの年月が経つ。黒い海が燈台の光を歌ひだすのは、むしろこれから……伊東静雄の死からであるに違ひない。

伊東静雄氏のこと

三島由紀夫

先月、伊東氏の訃をきく。数日前、堀辰雄氏の訃に接する。少年時代の敬愛の的であつた二先輩が、踵を接して世を去られたのは、私自身にとつても、自分の少年時代を永遠に葬るやうな切々たる感がある。

少年期の私には、本当のところ「夏花」における青年の焦立ちと、苦澁と、苦い逆説と自虚と、透明な不安との織りなす劇はよくわからなかつた。却つてその後の「春のいそぎ」における古典的完璧を通じて、伊東氏の詩業に憧れてゐたと云つていい。

しかし今度読み返してみると「夏花」はいたく私の心を搏つた。「燕」の世界感情は、時あたかも昨年の五月に見た、希臘の廃墟やローマのコルツセウムの上を飛び交ふ燕の影を想起させた。「砂の花」における、ゲーテの「野薔薇」を思はしめる残酷な抒情と単純なイメーヂとの古典的結合。「八月の石にすがりて」のニイチェ的運命愛と純粋孤独の明晰な投影。「夜の葦」の高度の静謐。「野分に寄す」の生ける自然の汎神論的イメーヂ。「若死」の倦怠にあふれたサティール。「洙雪」および「疾駆」の「春のいそぎ」に通ずる音楽性。「笑む稚兒よ……」の、

わたしがねがふのは日の出ではない
自若として鶏鳴をきく心だ

といふ詩人の生活の確立とその決心。すべてが、現在の私が定着したいとねがふ青年期の深い暗さと深い明るさに彩られた感情の風景を、すでにこれ以上はない明晰さで、表現してゐるのである。私は落膽し、又、羨望した。

仔細に見ると、ヘルデルリーンは浪漫派なりや否やといふ困難な論争が、伊東氏にも妥当するやうに思はれる。伊東氏の詩業は、萩原朔太郎氏よりもはるかに明晰で、しかも豊かな外光に溢れてゐる。これは古典的特質である。およそ浪漫派の通弊とされる感傷過多情緒性、観念的あいまいさ、感情の暴力、さういふものは「夏花」の中に一点といへども見られない。しかもこの古典的完璧を支へるものは、冷たい理智ではなくて、琴線の灼熱した緊張なのである。

私はむしろ「夏花」を古典的な「春のいそぎ」を浪漫的な詩集と考へたいが、かくも詩人の青春は逆説的な形をとつてゐて青年期の詩人がその浪漫精神に規矩を与へようとして成功した「夏花」は、壮年に達した詩人がおのれの中の青春から安心して軛を外した「春のいそぎ」の教篇へと発展するのである。

すでに自分のものではない青春は、「春のいそぎ」に野の果ての火のやうにもえてゐるこちらには詩人がをり、むかうには青春がある。この微妙な対立のふしぎな音楽的融合は「羨望」にいちばんよく窺はれる。

訳のわからぬうらやましい心持で
この若い友の顔をながめた

詩人が「若い友」の青春を理解したそのすばやい仕方が、この一篇の微妙な目にみえない主題なのだ。神迷の共感、……詩人をして「海戦想望」で「つはものの頬にのぼりしゑまひ」を想像させるものもこの同じ共感である。

ほとんどこの共感は、音楽の作用である。「春のいそぎ」では、古今集のやうな音楽性が完璧に達してゐる。詩人の精神が、対象に同化する速度の迅速さ。「夏花」であのやうに無惨に口をあいてゐた深淵の、不可思議な架橋と縫合の作業、又その静かな危険が「春のいそぎ」の諸篇の緊張の源泉なのである。

私は一度伊東氏にお目にかかつたことがある。萩原朔太郎氏にも死去の年に一度お目にかかつた。日本の近代詩の友達たちに、一度でもかうしてお目にかかつて、歴史の肉体に触れえたことは幸ひであつた。又一方、あまり沢山お目にかゝりすぎる弊害から免かれてひたすら作品を通じて、今日も伊東氏の魂に触れてゐることは、詩人の永生を信ずる心を容易にしてくれる点でも、幸せであつたと思はれる。現世の果敢ない逢瀬が、永生の証しともなることは、ホフマンスタールも、その美しいエッセイで、左のやうな一行に暗示してゐる。「ひとつの会釋はなにか無限なものである」

☆ ☆ ☆ ☆ ☆

餘白に

☆「詩学」の六月号に、伊東静雄追悼の頁が編まれ、伊東静雄作品抄、春と死（小高根二郎）猫柳（蒲地歌一）先生のこと（庄野潤三）思ひ出（長江道太郎）旧友伊東静雄（蒲地歌一）及び、年譜の記事がある。

☆「祖国」の伊東静雄追悼特集に就ては別に、目次を掲載してをいた。

☆長崎縣諫早市（詩人の故郷）東小路町駅通り、紀元書房刊行、上村肇個人雑誌「河」の第二輯も亦伊東静雄追悼号を編み、小高根二郎氏、俳人市川一郎氏、及び伊東氏の佐賀高校時代の恩師、酒井小太郎氏の諸氏が追悼記を綴つてゐられる。

☆ブシケの伊東静雄追悼は、本輯その三、で一應打ち切ることにする。前輯の林の雑誌に就て、井上靖氏からお懇切なおたよりを頂戴してゐる。今後も、ブシケは伊東氏に就ては、毎輯書きつゞける筈である。それは、そのことで、詩、それ自体に触れることを僕達は感じてゐるからである。

日は遠く！

芳賀檀

危い、貧しい最後の日は
あなたのような奇蹟を生みます
夜の奇蹟よ！
どのような光りも、歌も、
あなたを透りません。
あなたの目は、天使を慄えさせ
あなたに向ってさしのばす天使の手は　血を流す
でしょう！
（血に汚れた時代のふしぎな出会よ！）
あなたが　ふり上げる　死の斧は、
全ての血を凍らせ、
全ての野を不毛にします。
未だ夜だったのですね！

夜は夜を生みます。
夜明けの前の恐怖の時よ！
戰慄する時間の空虛よ！
もうあなたの髪も、眉も　おぼえてはゐません。
が、たしか、あれは暗い、影だったかも知れま
せん！

★

どんな出合にも育ち、
どんなめぐり合ひをも夢見る私も
あなたの冷たい壁にだけは脅えます、
ああ、殆んど　私は再び死にめぐり合ったので
す！

詩篇

林富士馬

何故だか知らぬ　そこを離れることが出來ぬので
群れて　飛翔してゐる
さうすると
不吉な鴉どもよ　といふ呟きを
お互ひの嘴に認める
が　僕達は　展望し　瞰下してゐた！
黒い百合の花が咲き乱れ

遙かに　溢れ出てゐる泉を知った
一匹づゝ　狼は飽食して去り
長い間　唯一の道連れとなり　倒れるのを待つて
ゐた禿鷲も
更に新なる餌食にと　何の未練もないのだが
いま尚　僕達だけが　その白骨の上を
群れて遊ぶ

新盆 他一篇

太田浩

孟蘭盆の晩、雷燈を消して天井から幾つも盆燈籠を點し吊るした座敷の、燈明を掲げた仏檀から、蒼ぶくれた裸のをとこが出てきて、秘かに誰もゐないあたりを窺つてゐたが、まもなく台所へ忍び入ると棚にあつた燒酎の一升瓶を取つてラッパ呑みにごくごくやり、闇がりで熟柿くさい息を吐いた。そして風のやうに座敷へもどりかゝつたが、何時のまにやら仏檀のまへに、つい先日置き去りにしたばかりの女房がひつそり坐つてゐたので、仕方なく一時の隠れ場所にと、そつと延び上つて、造花や長い銀紙の帛をくつつけた切子燈籠の一つへ頭を突込まうとした。とみるや忽ちにめろめろ炎が上つてそれが燃えだしたので、あたりが一瞬明るくなつた。庭で凉んでゐた者らも女房も何事かと驚いて振り向くと、燃え盛る盆燈籠の炎に、新仏の形相が、汽車にふつ飛ばされたときと全く同じい酸鼻を極めた割れ柘榴の惨屍態が、再びありありと浮き上つてゐた。しかも口にはALCOHOL・LAMPのやうに、淡いむらさきの火をともしながら。

町

傘をつぼめるやうに
夕空は　西へ暮れていつた
そこから　字幕のやうに
金星が　浮かんで來た

夏が來る

瀬古隆一郎

湿つた砂丘や小石のうへに、空がうごき始める。
紅い脚光を浴びて。

海原に市が立つ。

海が瀝青をおびるのは空が溶けこんでゐるから。
久しき日の
時間は煌き煌き移つてゆく。

わた雲と　小鳥と　空にも深い漲りがある。
落下する
礫のやうにうたひだす。

膨んだ帆が還つてくる
——私のなかにも。
暮れしぼむと、八十八夜。

あのはるかな面を
夏がかゞやかしく渉つてくる。

惜春歌

十史一之

恋としもなく行きずりの列車の中、人の世には何のしやわせもなし。生き死にの限りに人はなつかしきも、忘れ果てし裏切りの数々はあれど、故なく悲しみ泣き、なべての君はつれなし。はる〳〵とたどる道に救いはなし。あゝ、空は暗く小田原近い海はさえ〴〵ととどろき、――あなたは吾木香、すゞしく歌えば、唄の数々は野茨の白……。彼のマインランドの昔語りに似て、夜毎夢見る思出はうすれ、すべての子の父に人はつれなく、巷をさまよう子等の瞳には、身を入れる寸尺の余地もなし。おのが〳〵かたみに呪い、おのれおのがじしによい痴れ、軒によれば、まことの犬が三角の牙をむいて吠える。あゝ、のがさじ、迷えるものにはつれなし、迷える者の涯には涙なし。なれど又われ、恋としもなければ行きずりの歌を、小声にて口ずさまず。

――1953.5.21――

詩人

宇都木淳

彼は默つて歩く
猫背の背を一層まるくして
彼は默つて　夜道を歩く
そこには　たれのものでもない
彼だけの時間がある

耀く星に　みとられて
不死鳥の天を翔ける
彼！

水脈のほとりに　花ひらく
搖藍の中の女よ

夜の静寂に耳傾けよ

――來る日も　來る日も
無言の行を続ける
もはや　かえりみるものとてない
愛するものとてない

だが

彼は　星が如何に美しいかということを
知つている

太宰治氏の書翰（その一）

（1）昭和九年十一月二日

今朝お手紙いたゞきました。不足税を六銭とられました。けれども六銭以上の價値のある文章なので、別に六銭を惜しいと思はなかつた。燈台の話がいちばん面白かつた。太宰治を研究するのは僕にまかせ給へ。散文の論文は、たしかに通讀したのですから、安心あれ。そのうち、もういちど讀んでもよいと思つてゐる。いま、ボオドレエルのダンディスムについてのエッセイを讀みかけ、貴兄へ葉書したくなつた。

杉並区天沼一ノ一三六　飛田方　太宰治

註。以下すべて、山岸外史氏宛ての葉書である。

（2）昭和九年十一月六日

山岸兄

恋愛関係などといふので、僕はうろたえた愕然とした。（冗談だよ）何か書いてゐますか。「職工と微笑」を讀みましたか。一讀の價値はあると思ひますよ。十日の会で呑み合ふのをたのしみにしてゐます。

追記　僕は小説を一日に一枚づつノロノロ書いてゐます。

（3）昭和九年十二月二十四日

お伺ひしてもよいのだが、このごろ、ひとに逢ふのが、こはく（？）（決心がつかず）なかなか行けない。

そろそろ二号の編輯たのみます。同人全部に、原稿と同人費のサイソク、「若いひと」にさせたら、どうか。

同人会は、どうです。

私、青い花の原稿いま工夫中。

お願ひ申します。

註。同人雑誌「青い花」の編輯のことか。

（4）昭和十年二月二十四日

只今、栖崎氏へ手紙出した。むづかしいものだね。（遊びに来ないか？）井伏さんは君をほめてゐた。見直した由。尊敬した由。演説を立つてしたのが気にいつた由。

千葉縣船橋町五日市本宿一九二八

太宰　治

註。栖崎氏は當時、新潮の編輯長。

（5）昭和十年三月十日

きみに三度、無言の御返事をさしあげた。三種三様の無言なのだ。それは、君の知つて居るとほりである。君の三枚の葉書が、どれほどの手應へがあつたか、それも、君の推察どほりだ。おそらく、ちがつてはゐないだらう。堀に石を投じて、堀の深さをはかる。きみは、堀の深さをはかり當てた。遊びに来てお呉れ。

（6）昭和十年六月三日

陶工が粘土をこねくりながら、訪問者とお天気の話をしてゐる。僕の文学談など、陶工のそのお天気の話と大差なし。口とは全く別なことを考へながら、仕事のための粘土をこねくつてゐる。

「自由の子」といふより「すね者」と言つたほうが自由の子の真意をつたへうる。

世田ヶ谷区経堂町　経堂病院内　太宰治

（7）昭和十年六月三日

佐藤春夫氏への手紙は、二三日中に書いて出します。「おほいなる知己」を得たよろこびを書き綴るつもりです。実は二三日まへ、緒方氏へ、歓喜の初花をささげたばかりなので、どうも書きにくいのだ。（同じ文句になりさうで。）

二三日してから書いて出します。

註。緒方氏とは、緒方隆士氏であらう。

（8）昭和十年七月　日　消印不明）

病気全快して左記へ転居いたしました。とりあへずお知らせ申上げます。

千葉縣船橋町五日市本宿一九二八

太宰　治

（9）昭和十年八月八日

「いま再び粧つて熾烈を求む」これがカンシャクのたねであつた。ぼく、「熾烈」の点では兄に劣らないと思つてゐる。誰が何といつても、いまでも、さう確信してゐる。土曜のバンに来いよ。また船に乗らう。

（10）昭和十年八月二十七日

（背後をかへり見た問題に就いて）

たしかに君は、意志的だつたのだ。それは、あのときすでにぼくにも判つてゐた。ぼくはあのとき、君の言行一致を感じて、おや、と思つた。好意を感じた。ぼくの手紙の文、もいちど読み直してほしい。僕、その意味で君への手紙に書いたのだが。心、通ぜぬもどかしさ。「作家と批評家」なるぼくの言葉もその意味なのだ。あのとき、たしかに君は意志的であつた。決意的にさへ見えた。君の「古い」の放言に就いては、自ら答辯あり。

（11）昭和十年九月二十二日

ぼくのいまの言葉をそのままに信じておくれ。

ぼくは客観的に冷静にさへ言ふことができる。（文藝春秋十月号）衣巻、高見、両氏には気の毒である。コンデションもわるかつたらしい。外村氏のは面白く読める。このひとの作品には量感がある。けれども僕の作品をゆつくり読んでみたまへ。歴史的にさへずば抜けた作品である。自分からこんなことを言ふのは、生れてはじめてだ。僕はひとりで感激してゐる。これだけは一歩もゆづらぬ。深夜ひとり起き出て、たよりする。ちかいうちにあそびに来て。ぜひとも。

註。作品「ダス・ゲマイネ」に就てなり。

東京の門

壱　無題

僕は詩嚢も糧も家もなく
夜更けた舗道の鈴懸の蔭に立ち

知念栄喜

何時までも何時までも
星と月の輝きを凝視める……
縺れる影（シルエット）甘いさやうならの囁き　陥没す

る靜寂　轢死した動物の斷末　夫等は淡く
消え去り軈て夜露に潤んだ鈴懸の葉が搖れ
ると
怺えてゐた感動が熱つく湧く
が、その時、悲しみも怒りもなく答へる
僕は全てを喪つた　戰爭(イクサ)のどよめきに似
て明け暮れ　咆哮する東京よ　綠の鄕愁
も奪つた！と
僕は靜かに夜の歩みを移す
鋭い自負と力を喚んで痛みつゝ……

貳　葉書

友よ、有難う。君ん許での十日間は相共に
鼓撫し、友愛の如何に深く結ばれ斷ちがたい
かを涙とともに感得した。東京の夕燒空を眺
めても湧が溢れる故か、山川草木に惠まれた
君の山峽が殊更恋しい。東京住民に成つて旬
日、僕は沙漠に潤沢の泉を切望する旅人のや
うに綠の自然を渴仰してゐる。植物性の僕だ
から一沙の渴仰なんだ。Mはセンチだ、しつ
かりしろ、戰鬪だとどやす。而し山峽生活を
回想すると瑞々しく滿たされるのだ。
君は炭小屋で横笛を吹いた。僕は薪を割つ
た。生木の香が發散する。鶯が囀り何鳥か鋭
く叫んで山頂に飛昇する。村道の酒亭に麥酒
が売切れてゐたので、山羊乳でごくりごくり
喉を潤ほしたものだ。独りの日は。三国山の
雪を望む岡の春草に仰向き、梅の木に倚つて
幾篇かの詩を書いた。少女たちが、ほんまに
なあ　ほんまになあと悠つくりした抑揚をつ
けて話し合ひ小川で群れ遊んでゐた。僕は水
車の音に耳を傾けて午前の時を過した。旅と
冒險を考へてゐたのか、昔語りのドンキ・ポ
ーテを懷しんでゐたのか…午前の水車の童話
の日々だつた。
墓場に茂つた櫻花が紅く爛れて泣いた狂女
の様だつたね、僕は王朝美人だと名稱(ナ)づけて
ゐた。諸業に漂れた男女の血を吸ひ盡してゐ
る樹花だから身顫ひするほど綯爛と悲願に狂
ひ咲いてゐたのだろう。君が今月号の詩
わが里の道の辺に桜樹あり。石の間より芽
生へて年ふるまゝに伸び太り。つひに石を
割りて亭々として枝栄え花影燎乱たり。ま
たこの里に夜に耕し夜に蒔くてふ狂人あり
雪深き夜その桜樹に聽きしとて来りて余に
告ぐ。
僕はたゞならぬ運命の彩賦を想ひ聽く。神は
悲業の血を無心に咲かせるものだ。山河麗し
い君の産土にも、狂するまでのおどろな執心
の形相を、僕はまざまざと視たのだ。
楽しかつた夕飼、五月の火燵を囲み、僕等
が山葵・椎茸、筆頭菜をつまんで晩酌にほろ
ほろする頃、美加那(ミカナ)、齊(イキ)が童話をせがんだ、
僕は即席、花賣少女と桃太郎を話つて膝に寢
かせてやつた。そうだ、齋(イキ)は眠くなると御飯
を喰べ乍らでも箸をなげだしお腹が痛いと言
つてそのまゝ眠つて仕舞、皆を爆笑させた。
君は世俗の牢獄に呻吟するともまだ幸福だ
愛兒愛妻のために起ち上れ。清らかな理想
に默禱せよ。如何に卑少な人間でも無漸に
癒れることは愛の冒瀆だ。文字では表現で
きない痛哭が噴く。信じ選ばれた僕達は苦
楽を倶に鞭韃しよう。
友、東京の夜明けだ。水色の空が顫え、カ
トリック寺院の尖塔が浮んできた。小鳥が朝
の旋回をはじめてゐる。自愛を切望する僕の
新しい日々のためにも祈つて呉れ。　草々

樂我鬼

☆六月の集りは、六月六日の第一土曜、午
后七時からであつた。集合者、芳賀先生以下
十名。以下例により、醉拂つてから、今月は
プロフィールといふ題目で、書いて貰つたの
を集録したのである。

☆

かん草の詩人よ、
霧流れ
いぶき草の咲く
小径で
パリーのベレーを傾け
日だまりに、だまつて
蝕まれた蒼黑いの
T・Bの歯をむいて
笑つた、人よ。
青白い、かの
微笑。!!

☆

プロフィールといふ横文字の意味は横顔だ
といふ。さて誰れの横顔を描かうか？
太宰治さんは横顔が得意で、横顔だけをみ
せたがつた。ブーシニキンの似顔に似てゐた
といふ。天皇さまの肖像は、昔は横顔しかな
かつた。明治さまの肖像のことで、このこと
を覚えてゐる。横顔を映しながら女の友達が
一人もゐない。

☆

伊達眼鏡が落ちそうではありませんか
無理して大きな丸い目で、濡れた瞳
そして素透しの四ッの目
トンボの複眼、ハイカラ好みなんですが
鼻がお高こう御座います
眼鏡がそれで胡座をかいて
たゞポンのマヂックがなければなほ結構。

—K—

☆

猿飛佐助について。こ奴は非常に利巧なに
んげんであつた。傳説めいた物語の中で躍り
まわるとされていたルネッサンス以前のひと
である。だが、原始人よりもつと古い猿の面
をかぶつて、何よりも人間くさくない顔を印
象づけられてゐる。否もつと案外美男子なの
かも知れない。全く煙にまいて逃げる術は、
佐助にきく外ない。女体の内部に、煙になつ
て忍び込む。何時あざむいて消えても責任の
ない。僕はほんとに忍術の秘傳が欲しい。
では左様なら。　瀨古

☆

素朴になつたり
ひねくれてみたり
泣きたいような
やけつ八なような
ひとよ耐えざるべからず

☆　（牧）

審美感がちがふのです
あなたはあまりに明るすぎる
私はインケンでオシバイがお上手！
私はいつも私のギマンの臭にちつそくし
ポーズだけの密画にヘドを吐き

——たまらない
私のギマンのプロフィール　淳

☆

プロフィール。僕はすぐ鶏のあのさりげない
素振りをおもい出す。他人を意識しながら
らしかもそこをすり抜けていくあの仕草。
鶏のはじらいや悲しみ。そんな時、薄い
刺刄(かみそり)で頸動脈をそつとなでて僕は無性に
鶏を殺したい。

☆

プロフィルも自我像と同じで、本物よりキレ
イでなければ滿足しないものがある。これは
弥次喜多道中なんで、笑うにたえたるもの
あろう。従つてコメデアンは明日の事を少し
も考えない。全く、理におちて面白くないが
我ら明日の心を誰が知ろう。（十史一之）

追憶

棟方知與惠

ミカンの花を摘む様に
一枚　一枚の葉を
暗いバックを頼りに
描きつゞけた時は
それが思ひ出にならうとわ
考えても見なかつた

思ひ出は
フトした事に依つて
生れる
再生される
そして又いつか消失してしまう

甘味な味を知り
恐怖を抱き
悲しく　せつない
全ての時に
忘れられた過去の事項が
海浜に戯れる
幼子の足許に
何の屈托もなく
押しあげる
波の様に動いて居る

思ひ出は美しい
人間としての喜びは
この中に溶解する液体か
それとも
固着した磯の小貝なのか

一九五二・一二・一五・

星

和多順之

——某亭の良き乙女に捧ぐるために——

星はけふも流れて行つた
静かな花むらのかがやきのなかへ

水はけふも光つてゐた
かなしみを洗ふ追想のなかに

さゝやかな祈りにも似て
星の言葉を信じてゐれば

遠い水いろの果てで
ふたたび蘇る茜いろの風があつた

あゝ星はけふも冷く光りながら
ふりかへる思いの中に濡れてゐた。

——一九五三・六・二六——

EMIを想う

牧　章造

一

EMIを想つていると
そのあたり　次第に陽がさしてくる
日向でうらうらしていると
EMIが木影になつてくる

二

裏山にのぼつて
崖から手をさしのべてみたけれど
木苺の花の枝には　觸れられなんだ
そのたまゆらの嘆きを
口笛に粉らしながら　歸つてきた

三

悲鳴をあげて　眼をさました
心配ごとがたくさんあつた

誰もいないのに
心は夢中で探し求めた
遠いEMIが
こんなにも近い

四

傘さして　ひつそりと
映画を見に行つてきたが
場末の映画館は　人まばら
暗い画面に降る雨もあり
はて　なんとよく似た人間の劇
劇中のEMIに耐えも得で
びしよびしよな
やつとの思いで戻るとは

五

望まぬ雨が降つている
眼交とざす雨の篠
心をとざす雨の篠
望まぬ雨に濡れそぼち
今日もまた街を歩かねば
ゆえなく街を歩かねば

編輯後記

☆去る者は追はず、来る者は拒まず、大道無門、プシケは絶対につぶさずに続けて行く。僕はすつかり疲れたので、経営編集を瀬古氏におまかせして、休息し、元気を取り戻すことにした。（林）

☆プシケも今月で十輯を迎へる。僕達仲間の二三人が相談して、林富士馬氏を中心に発刊の運びになつたものである。編輯は主に林氏が携はり、僕なぞは最初の約束も忘れて其れに寄り掛る様な形になつて仕舞つた。仲間も次第に増えるにつれて、外からも絶えず種々な援助があつたことは忘れられない。プシケの仲間はそれぞれ癖を持ち、この曲者達が兎や角云ひ乍らも、此處迄続いて来たことには林氏の容易ならぬ忍苦があつたに違ひない。この頃は体重が二貫目も下廻り、発狂寸前になられた由、夜も殆んど眠れず、薬を飲めば景気のよい寝言ばかり絶叫する由（もつとも睡眠薬を差上げたのは自分だが）ゆき掛り上編輯のバトンは僕に渡つた。従来の色彩が多少でも損はれることなければ幸ひである。敢行してみる。

☆増頁を機会に、當初から何彼と執筆の勞を惜しまれなかつた芳賀檀、山岸外史両先生をはじめ、小高根二郎、江口榛一、伊藤桂一庄野潤三、島尾敏雄、三島由紀夫の諸氏に衷心から御礼の気持でいつぱいである。また僕達のこの無理な注文を莞爾と引受けて下さつた白馬印刷所の御厚情も忘れてはゐない。

吾々仲間は、ヂャーナリズムの内情とか、ゴシップには殆んど興味はない。外部の僕達に幾らかでも好意を持たれる方からも云はれる様に、強固な吾々の結束に驀進する。そして一角を築く。僕達は良き先輩友人に恵まれそして磨かれ、更に新しく躍動してゆき度い

☆牧野径太郎詩集「拒絶」（プシケ叢書1）の出版記念会が六月廿七日池袋東口マルグリットで開かれた。參会の人々は約四十名に及び、プシケ同人、日本浪曼派、歌壇の先輩友人から温い忌憚のない御批評と、各地から寄せられた祝文の披露、花束贈与等があり、すこぶる盛会に終つた。今後もプシケ叢書は引続き刊行される筈である。（瀬古）

執筆者住所

京都府宇治市宇治善法玲音庭小高根二郎
目黒区緑ヶ岡二三二三　三島由紀夫
文京区大塚坂下一一四　芳賀檀
豊島区西巣鴨二ノ二四六五　林富士馬
豊橋市旭町一六一ノ一　太田浩
豊島区池袋一ノ一　瀬古隆一郎
静岡縣田方郡大仁町帝産台　十史一之
豊島区高松町二ノ三二　宇都木淳
荒川区日暮里三ノ一九一　明廣印刷所
静岡縣田方郡大仁町吉田　知念栄喜
太田区桐里町六内田方　棟方知興恵
牧章造　和田順之

昭和廿八年七月五日印刷納本

編集　林富士馬
発行人
豊島区池袋二ノ九三一
印刷所　白馬印刷所
東京都豊島区西巣鴨二ノ二四六五
発行所　プシケ社
電話大塚一一九七

頒価　三十円

月刊雑誌「祖國」伊東静雄追悼号

発行所　京都市上京区新町通椹木町下ル
まさき会祖國社
振替　京都七〇一七　定価五十円　送料四円

報筆者　佐藤春夫、栗山理一、伊藤佐喜雄、西垣脩、小高根二郎、庄野潤三、吉村淑甫、谷口卓男、石森拓雄、長尾良、上村肇、牧野径太郎、池沢茂、柳井三千比呂、林富士馬、知念栄喜、三島由紀夫、永瀬清子、富士正晴、伊藤夫人、百田宗治、清水文雄、保田与重郎、前川佐美雄、子持新作、

牧野徑太郎詩集

拒絶

プシケ叢書　1

布引クロース製、本文フール入木炭紙一一二頁　定價〒共三百円
陳方志功装幀、　中谷孝雄序文

申込所　荒川区日暮里三ノ一九一
プシケ社出版部

発行所　杉並区荻窪四ノ五七
日本藝業院
振替　東京一一六〇六二番

紹介の頁

加藤克己歌集

エスプリの花

齊藤清装・箱入美本

昭和二十八年四月二十九日發行

定価 二七〇円
送料 三〇円

白玉書房

申込みは鶏苑發行所へ

吉本青司詩集

夏路

プシケ叢書 2

御申込はプシケ発行所宛に
又は高知市西新屋敷七五 吉本青司宛

山川弘至著

折口信夫 保田与重郎序

日本創世叙事詩

昭和二十七年十二月十五日發行

發行所 東京都台東区西町八

長谷川書房

電話下谷四七九三

定価三〇〇円 郵税三五円

短歌雑誌

鶏苑

入会、原稿に会費を添し何月よりと明記して申込む。
会費、一ヶ月五〇円（六ヶ月又は三ヶ月分前納のこと）
同人規定は別に定む

發行所 浦和市岸町五ノ九四

鶏苑発行所

振替東京六四六五〇

電話 浦和三六四六